広島大学附属福山中・高等学校
中等教育研究紀要　第40巻

文章で表現しよう

藤原　敏夫

郷土にかかわりのある題材を取り上げ，生徒の感性を大切にしながら，生徒が主体的に学び，自らの作品を創りあげるという学習である。具体的には，福山市鞆の浦にかかわりのあった万葉歌人大伴旅人の歌を中心にして，旅人自身の生涯をたずね，「旅人の心」をとらえて，「わたしの大伴旅人物語」という作品を創るという学習である。

1　講座名　実感と創造「郷土の文学」

2　対　象　中学校３年生23人（男 11人，女12人）

3　学習のねらい

今の生徒たちは種々の機器を操作し，既成のもの活用することには長けているが，ものごとに感動し，それを自分のことばで表現することには苦手な傾向がみられる。そのため，実感を大事にして自分の感性をみがき，自分のことばで自分の作品を創りあげる力がもとめられている。

それは，“わたしたちの郷土には，約1200年前につくられた歌があり，それを現代のわたしたちがよむことができるという驚きと感動”とからはじまる。具体的には，万葉歌人大伴旅人が鞆の浦に立ち寄ってつくった「三首のむろの木の歌」の存在を知り，歌にこめられた「旅人の心」にせまろうとすることからはじめることになる。

教師自身が自らの感動にもとづいて作成した教材を，生徒が自分の感性にたよってよみ，さらに現地学習会などを通して実感をもっていっそう深くよみ味わう。同時に，生徒自らが課題（「わたしの大伴旅人物語」をつくること）を設定し，課題解決に必要な情報収集・分析を行い，自分の作品を創りあげることをめざす。言いかえれば，生徒と教師とがいっしょになってひとつの作品を創りあげるという学習である。

4　具体的な学習内容

(1)　教材　「鞆の津とむろの木」―大伴旅人物語―

(2)　教材のねらい

自分たちの身近な所にある古典の世界へ足をふみ入れ，当時の人々の心にふれる。すなわちわたしたちの町の古い港，鞆の津とそれにかかわる大伴旅人の歌をよむことにより，万葉人の心にふれ，「万葉集」に親しむきっかけとしたい。

また，この学習を通して，郷土の風景の中に歌（文学）のあることを知り，郷土を見直し，郷土を大切にする心を養い，自分の作品を創りあげたい。

(3)　年間学習計画

	月	学習のねらい	単元名	学習の具体的な内容
Ⅰ学期	4月～7月	自分の感性と自分のことばで作品を味わう	「旅人の心」をよむⅠ	・校内の「むろの木・歌碑」の確認。 ・自主作成教材「『鞆の津とむろの木』―大伴旅人物語―」をよんで旅人の生涯の概要を知る。 ・語釈なしで旅人の歌にあたり，「旅人の心」をよむ。 ・自分達のことばでつくった口語訳にもとづいて「旅人の心」をよむ。

Ⅱ学期	9月～12月	現地にたった実感をもとにより深く作品を味わう	「旅人の心」をよむⅡ	・「鞆の浦」現地学習会，映像（桜井・飛鳥・奈良・太宰府のスライド）を通して，「旅人の心」をより深くよむ。 ・図書室で必要な資料を収集し，「自分の大伴旅人像」のイメージをふくらませる。
Ⅲ学期	1月～3月	創作・発表活動を通して自己表現をする	「わたしの旅人物語」をつくる	・いままでの学習をふまえて，400字詰めの原稿用紙20枚以上で，「わたしの旅人物語」を創作する。 ・自分の作品に題をつけて，簡易製本する。 ・完成した作品を互いに発表し合う。

(4) 学習指導案の一例

① 本時のねらい　「自分の旅人像」を描く

② 学習指導案

時間	指導項目	指導内容・学習活動	指導上の留意点
			・各自の書いた「旅人の心」の用紙を配布しておく。
	発表	・今までの学習内容の確認。 ・「鞆の浦現地学習会を通して感じた旅人の心」についてまとめたものを読む。 （数名に指名して発表させる。）	
10分	理解	・各自，教材「鞆の津とむろの木」を黙読する。	・「旅人の生きてきたあとをたどる」ことを指示する。
20分	創作表現	・都（平城京）の自宅にいる旅人が「『鞆の浦の思い出』をかたる」という形で，200字程度にまとめる。	・200字の原稿用紙を配布する。 ・机間巡視をする。
45分	発表	・数名に指名して発表させる。	
50分			

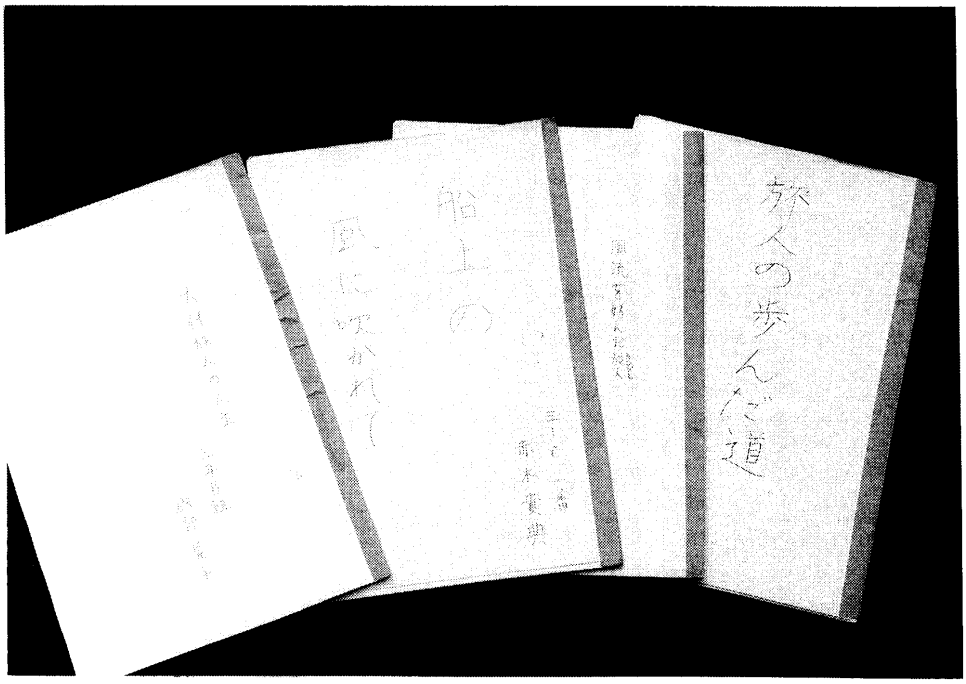
5　まとめと課題

学習を通して，生徒・教師ともに楽しむことができたのが一番の収穫であろう。生徒は，はじめはとまどいながらも，自分が動かなければ何も進まないことを知り，少しずつ主体的に取り組む姿勢がでてきた。そして，自分の知らなかった世界に足をふみ入れた驚きと感動にふれた時，飛躍的に学習意欲の向上がみられた。以後，自分の感性に自信をもち，理解力・表現力・創造力を結集してひとつの作品をつくりあげるよろこびを感じることができたといえよう。また，教師は自身の感動にもとづいて，新しい教材を作成するよろこびと，生徒とともに学ぶたのしさを味わうことができた。

いずれの場合も，今回の学習の原動力になったのは，「実感・感動」であったといえよう。

しかし，まだ試みの段階で，生徒自らの手で学習の対象となる題材を探し，選択すること，この学習が生徒の将来とどうつながっていくか，すなわち，「生きる力を育む」こととどうかかわってくるかについての展望が不十分であることなど，残された課題は多い。

フィールドワーク（鞆の浦現地学習会）



生徒作品「わたしの大伴旅人物語」

自主作成教材　「鞆の津とむろの木」　―大伴旅人物語―

万葉へのいざない　1.

「鞆の津とむろの木」―大伴旅人物語―

師走の鞆の浦、冷たい潮風に吹かれながら、仙酔島への渡し場から対潮楼を見上げるとき、一つの歌碑が目に入ります。――――

吾妹子が　見し鞆の浦の　むろの木は　常世にあれど　見し人そなき

七三〇年（天平二年）十二月に、大伴旅人がよんだ歌です。遠い昔、わたしたちの郷土、鞆の浦を、大伴旅人という万葉の歌人が訪れていたのです。旅人は、当時、武力をもって朝廷に仕える大伴氏一族をたばねる立場にあり、また風流を好む人でもありました。

大宰帥（大宰府の長官）の勤務を命じられた旅人は、七二八年（神亀五年）正月、六十四才で、年老いた妻、大伴郎女を伴って、難波津（大阪の港）から瀬戸内海を船で西に向かいます。途中、鞆の津に立ち寄り、美しい島々の景色をたのしんだことでしょう。万葉の昔から、鞆の津は、東西からの潮がぶつかり合う潮待ち・風待ちの港として栄えていたのです。そこで、二人の目にしたもの、それは大きなむろの木です。むろの木は、人間に長寿と幸せをもたらす神の木といわれ、老夫妻は、これからの航海の安全と、二人の行く末の幸せを祈ったことでしょう。

旅人は、六六五年（天智天皇の四年）に生まれました。大宰府でよんだふるさとをなつかしむ歌からは、若き日、跡見の庄（現在の奈良県桜井市）ですごした日々がしのばれます。多感で幸せな青春時代を送り、妻大伴郎女との恋の花も開いたことでありましょう。

333　浅茅原つばらつばらにもの思へば故りにし郷し思ほゆるかも

334　わすれ草わが紐に付く香具山の故りにし里を忘れむがため

香具山のみえる跡見の庄、それは忘れようとしても忘れられず、自然に思い出される
ふりにし里なのです。

旅人の歌が、万葉集にはじめて登場するのは、七二四年（神亀元年）三月、六十才の時、聖武天皇に従って、吉野に出かけた時の歌です。

316　昔見し象の小河を今見ればいよよ清けくなりにけるかも

かつて訪れた吉野山のふもとにある象の小川を再び目にしている旅人の姿が浮かんできます。昔感動した小川の清らかさ、今目の前にある小川は、以前にもまして清く感じられ、流れる水の音までがきこえてくるようです。